

## 英語コミュニケーション能力の育成には何が必要か

-日本の英語教育と KLAS の教育実践の比較から-

渡邊 博司

(スイス公文学園高等部)

### はじめに

世界のグローバル化が進む中、日本人は英語ができないといわれる。一方、筆者が校長を務めるスイス公文学園高等部 (Kumon Leysin Academy of Switzerland, 以下 KLAS とする) は英語コミュニケーション能力の育成に成果をあげている。コミュニケーション能力育成のための理論に触れ、日本の英語教育施策と KLAS の英語教育実践を比較しながら、その理由を探り、英語 (運用) 力の育成に何が必要かを論じる。

*KLAS* : 1990 年スイスに設立され、文科省より在外教育施設 (高等部) として認可された日本人を対象とする高校。教育課程は学習指導要領に準拠し、生徒は国内高校生と同じ内容を学習する。在校生 183 名 (2012 年 9 月現在) のうち、97% にあたる 178 名は日本国内の中学校出身者であり、3 名は海外日本人学校 (中等部)、2 名は現地校 (中国語) の出身である。これまでの卒業生 1073 名のすべてが日本語を母語としており、英語は第 2 言語である。

### 1 章 日本の英語教育と KLAS における英語教育の成果

#### 1-1 日本の英語教育の現状

グローバル化する世界経済の中核をになう日本の役割は重要性を増しており、日本人の英語コミュニケーション能力の必要性が指摘されて久しい。

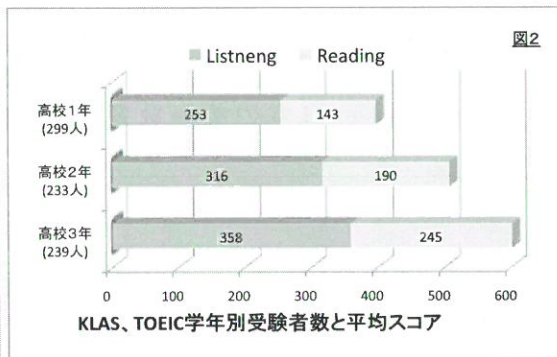
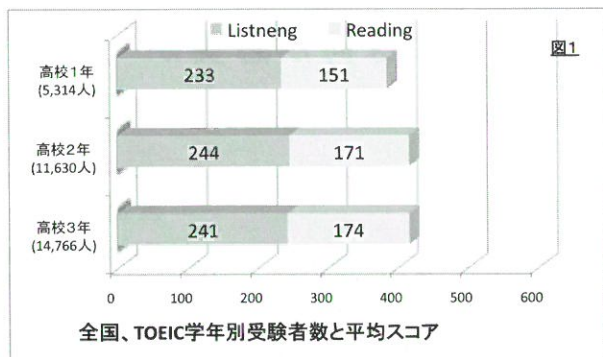
世界各国の中で日本人の英語力はどのように位置づけられるであろうか。ETS<sup>i</sup> によれば、TOEFL スコアの国別ランキングでは、日本は 163 カ国中 143 位、アジアの中では 30 カ国中 29 位と低位置に甘んじている<sup>ii</sup>。もちろん、母集団と学習者、学習者とテスト受験者の関係は各国で事情が異なるので単純な比較は難しいが、大学教育を含めると長期にわたって相当な時間とエネルギーを英語の学習に費やされている日本の教育事情を考えれば、この結果はコミュニケーション能力の育成に関する限り、成果を疑うに充分ではないか。

#### 1-2 KLAS における英語指導の成果

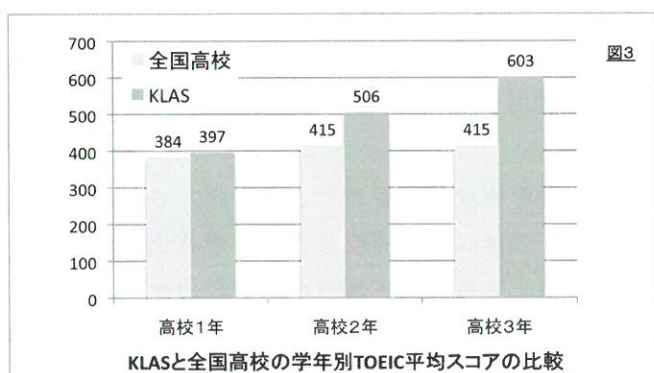
日本人が英語の習得に苦勞する中、KLAS では生徒に確実に英語運用力を身につけさせることに成功している。

KLAS では生徒の英語運用力の伸長を測定し、生徒の動機づけと教育効果の確認に役立てている。年に一度、生徒本人の進路目標に応じて、TOEIC か IELTS、もしくは

その両方を受験する。KLAS の生徒の TOEIC の結果<sup>iii</sup>を、日本全国で受験した高校生の結果<sup>iv</sup>と比較する。



これらの結果を同一スケールで並立表示したものを次の図3で示す。



全国高校生の学年別平均スコアは、384→415→415 と、3年間での上昇はわずかでしかないことが見て取れる。一方で、KLAS 生の学年別平均スコアは毎年 100 ほどずつ確実に伸びており、卒業学年では平均で 603 と、TOEIC のスコア評価ガイドラインが定める「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」レベルに達していることもわかる。

見落とせないのは、高校1年段階では両者には大きな差異が見られないことである。KLAS のほとんどの入学生は日本国内各地の中学校の卒業生であり、平均的な日本の中学校の英語教育を受けてきた学習者である。したがって、高1段階でのスコアの近似は過去の教育の相似を示すものであり、その意味では高3学年での平均点の大きな隔たりは高1から高3の間の英語教育の相違が生み出したものであると言えよう。

### 1-3 日本人が英語のできない理由

1-1 でみたように、勤勉な国民性で世界に知られ、教育熱心な日本人がその厳格な教育制度の中で長期にわたって英語を学んだ結果に得られた英語力は、TOEFL による英語運用力を尺度とする比較では世界的にはかなり低位に甘んじている。日本人が英語のできない理由はどこにあるのか。

これまでさまざまな分析と解釈が試みられたが、理由の一つは日本語と英語の間にある言語構造の違いに求められるであろう。学習者の母国語と学習対象となる言語の構造が異なれば異なるほど、言い換えれば距離が離れているほど学習者にとっては

言語の習得は困難であると云うものである。つまり、英語と日本語の言語構造上の距離が英語習得の障害になっているとするものである。

つぎに、学習者の心理的側面に注目し、動機づけの問題からこの理由にアプローチすることも可能である。国境や言語境界が入り組むヨーロッパの各地域や、かつての植民地政策の下で宗主国の言語の影響を強く受けたアフリカ、アジアの各国に比べて、日本人にはどうしても英語を使わなくてはならない状況は少なく、これが学習者の第2言語習得の動機を弱くしていると言う説明である。

動機づけの問題に関連して、大学入試英語などがコミュニケーション能力とは別の、英語能力を求めるなど、英語力に関する日本独自の社会的要請があることが指摘されることもある。

以上は言語特性や社会状況などにその理由を求めるものであるが、英語の指導法にその理由を求めることも可能である。即ち、日本における英語教育の根底に横たわる文法訳読方式がコミュニケーション能力を十分に育てていないというものである。文法や語彙などを重視するこの方針は GTM (Grammar Translation Method, 文法訳読方式) と呼ばれる。世界の英語教育法の潮流が既に脱 GTM を果たしている中、長年、日本の英語教育の特長であるとされてきた GTM の影響が指摘される。

#### 1-4 日本の高校と KLAS の違いは何か

前項の日本人が英語のできない理由の内、言語特性や社会状況から生まれる理由では全国の高校と KLAS との英語教育効果の違いは説明できない。両者の英語教育環境において際立った相違を見せるのは指導法と動機づけである。本稿では、両者の教育効果の相違を説明するために、これらの点に注目して考証したい。

**指導法**：1980年代以降、日本においても学校現場でいわゆる Focus on Form から Focus on Meaning<sup>1</sup>への移行が求められてきたが、未だに GTM に頼る傾向から抜けきれてはいない。例えば、吉田が 2003 年に大学 1 年生を対象に行ったアンケート調査では、「高校での英語 I や英語 II などの総合英語とされる科目の授業形態は 85% が GTM であった」という。これに対して、KLAS における英語指導法は、後述するように、この変化を完全に先取りし、Focus on Meaning の指導法に徹したものであると言える。この実践を 4 章に詳述する。

**動機づけ**：日本国内では、文部科学省や専門家がコミュニケーション重視の指導の改善に努力をしている。しかし、教室現場では大学入試への対策を無視できず、入試で測られる英語能力が読み書き文法中心になっている以上、どうしても教員も生徒も文法・訳読に動機づけられているのが現状である。さらに、教室の外で英語を用いる環境は希薄で、メッセージ伝達そのものへの動機づけも弱い。これに対し

<sup>1</sup> 吉田によれば、「Focus on Form は、言語の学習にはまず文法や語彙などの言語の形式をしっかりと覚えることが大切だとする考えが中心で、文法訳読主義やオーディオリンガル・メソッドなどの教授法に代表される。Focus on Meaning は、コミュニケーションを意識した考えで、言語はそもそも「伝える」内容や目的があり、それが使用される場面での働きや意味に注目する。内容やタスク中心の教授法に代表される」とされる。（「英語教育法の展開」桜美林大学教職課程年報第 2 号 p48）



て、KLAS では、教室において聞く・話す・読む・書くなどの英語を用いる課題活動をふんだんに活用する他、教室の外でも英語を公用語とし、情報伝達をすべて英語で行うなど英語使用を徹底するなどして、英語習得の動機づけを行っている。これらの諸活動を5章にて紹介する。

## 2章 教育行政にみるコミュニケーション能力の育成

日本の英語教育と KLAS のそれを比較検討する上で、日本の英語教育が Focus on Form から Focus on Meaning へ向かおうとする過程を見ておきたい。次表に「学習指導要領の変遷」を示す。

高等学校 学習指導要領「外国語」の変遷

	1997年・第4回改訂 1982年4月 入学生より実施	1989年・第5回改訂 1994年4月 入学生より実施	1998年・第6回改訂 2003年4月 入学生より実施	2009年・第7回改訂 2013年4月 入学生より実施
目標	「外国語を理解し、外国語で表現する能力を養うとともに、言語に対する関心を深め、外国の人々の生活やものの見方などについて理解を得させる」	「外国語を理解し、外国語で表現する能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める」	「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意志などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う」	「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを適切に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」
科目の構成	英語Ⅰ 4 英語Ⅱ 5 英語ⅡA 3 英語ⅡB 3 英語ⅡC 3	英語Ⅰ 4 英語Ⅱ 4 オーラルコミュニケーションA 2 オーラルコミュニケーションB 2 オーラルコミュニケーションC 2 リーディング 4 ライティング 4	オーラルコミュニケーションⅠ 2 オーラルコミュニケーションⅡ 4 英語Ⅰ 3 英語Ⅱ 4 リーディング 4 ライティング 4	コミュニケーション英語基礎 2 コミュニケーション英語Ⅰ 3 コミュニケーション英語Ⅱ 4 コミュニケーション英語Ⅲ 4 英語表現Ⅰ 2 英語表現Ⅱ 4 英語会話 2
言語活動	「聞くこと・話すこと」「読むこと」及び「書くこと」の3領域で構成。	「聞くこと・話すこと」をそれぞれ独立させて、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び「書くこと」の4領域で構成。	4領域の示し方を改め、相互の有機的な関連を図ったコミュニケーション活動として示す。さらにそれに必要な指導事項も明示。また、言語の使用場面や言語の働きを例示。	具体的な言語の使用場面を設定して、各科目で例示されたような言語活動を行う。
言語材料の取扱い	各科目ごとに言語材料を割り当てて	科目ごとの言語材料の割り当てをはずし、まとめて示す。	学習負担の軽減のため精選。	文構造について材料提示をやめ、文法は精選内容のみを提示し、言語活動との関連づけをもとめる。各科目は英語で行うのが基本。
語	英語Ⅰ 400語～500語までの新語 英語Ⅱ 上に加えて600～700語までの新語 英語ⅡB 400～700語までの新語 →1400～1900語	英語Ⅰ 500語までの新語 英語Ⅱ 上に加えて500語程度までの新語 リーディング 上に加えて900語までの新語 →最大1900語	英語Ⅰ 400語程度の新語 英語Ⅱ 上に加えて500語程度までの新語 リーディング 上に加えて900語までの新語 →最大1800語	○英語Ⅰ 400語程度の新語 ○英語Ⅱ 上に加えて700語程度の新語 ○英語Ⅲ 上に加えて700語程度 →最大1800語

文科省、「英語指導方法改善の推進に関する懇談会」報告・資料に加項

### 2-1 「言語活動」の登場：1970年・第3回改訂

表からは、第5回改訂においてはじめて「コミュニケーション能力の育成」が登場し、その後は、この基本方針を強化する流れとなっていることが見て取れる。

この改革の流れのスタートといえるのが、表にはないが1970年・第3回の改訂である。この時、英語の授業における「学習活動」を「言語活動」と表現し、実際に「聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする言語活動」（文部省1970）の重要性が強調される。ここにはじめて、英語の学習がコミュニケーションと結びつけられたと言って良い。

## 2-2 「コミュニケーション能力の育成」：1989年・第5回～1999年・第6回改訂

第5回及び第6回の改訂を通して、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を重視して、活発な言語活動を促そうとした。そのために、言語材料の扱いをより弾力化して、教室現場に応じて柔軟な指導を期待した。総語数など、生徒の学習負担を軽減して、言語活動の活発化を図ったが狙い通りに進んだとは言えない。

## 2-3 「英語の授業は英語で行う」：2009年・第7回改訂

この改訂は2013年から高校で実施されるが、これにより言語活動のさらなる活性化を進めようとする。そのために、教室において具体的な言語の使用場面を設定して言語活動を行ったり、文法は言語活動と結びつけて指導することを求めている。

特筆に値するのは、英語使用に強制力をもたすために、「英語の授業は英語を基本とする」（文科省2009）ことを定めた点である。これにより、英語の授業そのものを言語活動とすることを図ろうとする。

## 3章 コミュニケーション能力の育成、指導法の理論

これまで、1章では日本人が使える英語を習得するためには、日本で伝統的に行われてきたGTM（文法訳読方式）から脱して、伝達される内容に焦点を当てる、より実践的な英語指導の実現と学習者の動機を維持できる環境づくりの重要性を説き、2章では、コミュニケーション能力育成のために教育行政がどのような取り組みをしてきたかを見た。次章では、そのためにKLASではどのような英語指導を行っているかを詳述するが、そのために、本章では、コミュニケーション能力育成のための指導法の理論的背景を概観する。

### 3-1 Communicative Language Teaching (CLT)

CLTは、コミュニケーションの実践に用いられる言語運用能力を養うことを目的とした指導法であり、その概念は幅広いものであるが、一般的には次のような特徴があげられる。

- ① 教師から生徒への一方向型の授業ではなく、学習者間で頻繁な双方向型のやり取りが行われる。
- ② 学習媒体としては、言語教育のために作られたものではなく現実に使用されるテキストを用い、実生活に関連のある活動を取り入れる。
- ③ 学習者中心(Learner-centered)であり、学習者の必要や目標にも考慮し、学習者にとって「意味のある活動」を行う。

CLTが生まれた背景には既存の指導法であるGTMや、1960年代北米で盛んになったオーディオリンガル法に対する反発があげられる。この二つは言語の形式的な側面(form:文法や語彙など)を重視していた点で共通しており、コミュニケーションに役立つ語学力の育成に際立った効果が見られなかったことから、1970年代に激しい批判が起こった。Hymesが指摘するように、「意思疎通を図るにはLinguistic competence(言語能力)の他にCommunicative competence(伝達能力)が必要であ

り、文法規則や語彙などを知ることは円滑なコミュニケーションに必要な能力の一部でしかない」と云う考え方が広まった。あらかじめ内容や形式が分かっているコミュニケーションの練習は、それ自体ではコミュニケーションとは言えず、練習にはならない。CLTはメッセージを伝える側と受け取る側が「意味のある活動」をすることで Communicative competence を育成しようとするものである。

### 3-2 Task-Based Instruction (TBI)

TBI は、学習者が与えられたタスク（課題や問題）を解決するときにおこる言語使用が言語発達を促すと云う考えにもとづいている。次のような特徴が見られる。

- ① 与えられるタスクをコミュニケーションを通して解決する。タスクには、必ず双方向型のやり取りが含まれる。
- ② テキストは言語教育のために特別に書かれたものではなく、authenticなものを使い、実生活に関連づけられた活動を取り入れる。
- ③ 言語の形式的な側面(form)よりもタスクをこなすことが優先される。Form に注意を向けさせることはあるが、あくまでもタスク遂行のためである。

タスク中心であるが、formは言語活動の中で自然に定着することを狙う。

### 3-3 Content-Based Instruction (CBI)

語学に関する科目に限らず、通常の科目を学習者の第2言語：Language 2（以下、L2）で教えることで、科目の学習と同時にL2の獲得につなげようとするものである。北アメリカではCBIと呼ばれるが、ヨーロッパではContent and Language Integrated Learning (CLIL)と呼ばれることが多い。L2に接する機会を最大限にすることが可能であり、さまざまな概念をL2で理解することで高度な語学力につなげることが可能である。次のような特徴をあげることができる。

- ① 科目の講義、それに関する発語が中心である。内容に関連するキー概念の理解に直線的に進むが、原則的には文法などのformを取り上げて説明するなどの活動はしない。
- ② 一般的には、語学学習用のテキストではなく、その言語を母語とする学習者のために書かれたauthenticなテキストを用いる。
- ③ 内容理解、コミュニケーション能力、文化理解、認知能力などについての統合的な学習が可能である。

CLTは、歴史的にはGTMやオーディオリンガル法に対する反省から生まれたものであり、TBIやCBIはその理念に基づいた指導法である。TBIとCBIに共通するのは、母語話者が用いるauthenticな言葉を教材として使用し、学習者に目的言語を使って「意味のある活動」をさせる点である。CLTという理念、TBIやCBIの実践的な指導法は、ここ2、30年の間に次第に明らかになってきた第2言語習得に関する原理の中から生まれたものであり、北米、ヨーロッパでは顕著な教育効果をもたらしながら広がりがつつある。



## 4章 KLASにおけるCLT(Communicative Language Teaching)

この章では、KLASの英語教育の特徴をCLT、TBI、CBIの考え方をを用いて分析する。

### 4-1 KLASにおける英語関連カリキュラム

KLASの英語関連の科目は、右表に示すように、教科・外国語(英語)に属して英語の習得を目的とする科目と、教科としては歴史/公民、数学、理科、外国語(フランス語)などに属すが、L2(英語)で指導する科目よりなる。表中、前者を英語科目として、後者を内容科目として示した。

表からは、生徒の選択科目の組み合わせによって個人差はあるものの、3学年を通して豊富な英語関連授業が確保されていることが分かる。また、学年進行に応じて、英語科目としての授業は減る一方で、英語で指導する内容科目の授業が増えている。

KLASの英語関連科目と週あたり授業数

学年	英語/内容	科目	週の時間数	選択/必須	授業数	英語関連授業数
高1	英語科目	オーラル・コミュニケーションⅠ	3		12	20
		英語Ⅰ	3			
		リーディング	3			
		ライティング	3			
	内容科目	フランス語Ⅰ	2		8	
		美術Ⅰ 情報A	3 3			
高2	英語科目	オーラル・コミュニケーションⅡ	3		9~12	12~25
		英語Ⅱ	3			
		ライティング	3			
		リーディング	3	選択		
	内容科目	English LiteratureⅠ	4	選択	0~19	
		フランス語Ⅱ	2	選択		
		世界史B	4	選択		
		数学Ⅱ	4	選択		
		物理Ⅰ及び化学Ⅰ	5	選択		
		美術Ⅱ	4	選択		
高3	英語科目	オーラル・コミュニケーションⅡ	3		6~10	14~27
		英語Ⅱ	3			
		ライティング	4			
	内容科目	English LiteratureⅡ	4	選択	9~21	
		英語総合演習	4	選択		
		フランス語Ⅲ	2	選択		
		Global Issues	5	選択		
		Research Project	5	選択		
		美術Ⅲ	5	選択		
		生物Ⅰ	4	選択		
世界史B	4	選択				

### 4-2 KLASの英語の授業とTBI(Task-Based Instruction)

英語教科の教室からは常に活気に満ちた活動的な様子がうかがえる。教師について声に出す、ペアまたグループでの課題演習、討論、人前でのスピーチなどがここから聞こえてくる。

一例として、ある日の高校1年生の「リーディング」の授業案を示す。

#### Lady Gaga Launches Anti-bullying Foundation

#### Reading Lesson Plan (2 classes)

#### Pre-reading (20 min) This can be done on the board...

- 1 Do you know who Lady Gaga is? What do you know about her? Talk to each other for 2 minutes. Share info together.
- 2 Sometimes famous people want to help regular people like you and I. Lady Gaga wants to help people who are being bullied. Do you know what a bully is?
- 3 Lady Gaga wants to help these people. What do you think she is doing to help these people who are bullied?
- 4 Watch Youtube video clip... What did Lady Gaga do? (She went to the White House and

told the president about the problem. She wants bullying to be a crime. She wants bullies to go to jail!)

5 Watch the clip one more time and tell me:

- (a) How many kids stay home from school every day in the US because of bullying?  
(160,000)
- (b) How many US kids say they are victims of bullying? (1/4)
- (c) What is the name of Lady Gaga's charity? (Born this way Foundation)
- (d) Who is she working with? (Her mom)

6 We are going to read an article about Lady Gaga. The title is: **Lady Gaga Launches Anti-Bullying Foundation**<sup>vii</sup>. Let's look at what this means and then read.  
*Launch: Start Anti: Against Bullying: Being unkind to other*

#### Reading:

- 1 Read together as a class and answer vocab. questions
- 2 Ss again and complete comprehension questions
- 3 Check comprehension question

#### Post-Reading:

- 1 Vocab. Review: Match and then game
- 2 Using the Vocab.: distribute "While Reading /Listening" and go through parts of speech again of the words on the right. Ss fill in spaces with the correct words.
- 3 Discussion Questions:
- 4 Letter Writing:  
Write a letter to Lady Gaga. Ask her 3 questions about her work. Tell her 3 things you think she should do next and why.

---

題材はこの授業の二週間ほど前に掲載された学習者用の英語記事サイト（注 vii）から利用している。いじめの話題が採用されたのは、学校の内外で大きく取り上げられているからで、多いに学習者の興味関心を惹いている。

本校時の主眼である記事読解の前に十分な準備を行っている。2校時分の指導案であるが下線部（筆者）のように13のタスクが与えられている。各々のタスクの多くは、決まりきった答えでは間に合わないので、自分で考え表現することが求められる。それは実際のコミュニケーションに近い「意味のある活動」となり、学習の効果が期待できる。対象が初学レベルの高1生であることに留意して、文法や語彙などの形式的な側面の学習も取り出して学習させている。ただし、本文読解が優先される。

この指導案はTBIの典型であり、こうしたTBIが他の英語科目でも全面的に展開される。



#### 4-3 KLAS の CBI (Content-Based Instruction)

上掲の表の通り、KLAS では学校全体で 17 科目において CBI に基づいた授業を展開している。潤沢な英語科目で SLA (Second Language Acquisition) の原理に基づく英語スキルの基礎を学んだ上で、こうした CBI の考え方による授業で英語の実用に触れる機会を最大限に増すことができる。

忘れてならないのは、ここでは英語科目自体も L2 (英語) で指導されることである。学習者の英語習得状況と進路希望によって、履修する英語科目や内容科目の数は異なるものの、L2 で行われる英語科目を考え合わせれば、学習者に働く CBI としての英語利用機会は日本の一般的な高校に比べて格段に豊富になっている。

各科目で CBI がどのように展開されるかを、内容科目のひとつである Research Project (課題研究) を例に示す。

---

**Research Project (課題研究):** 高校 3 年時に配当される週 5 時間の選択科目生徒自らが設定したテーマに沿って調査研究した内容を、英語で正確な論文の形式に則って表現するための技術を習得する。

この科目の年間学習指導計画書は年間指導目標を次のように定めている。

Objects:

The main goal of this class is to guide students through the process of writing and documenting research papers to a level acceptable in western universities. In addition, the research, organizational and time management skills learned will be helpful in Japanese universities and every life. The text, 'Writing Academic English' will teach students to write in different style and for different purpose, including chronological, cause-and-effect, comparison-and-contrast, pro-con and academic argument research papers. The MLA handbook will be used to teach proper documentation of academic papers.

---

この学校の卒業生は日本以外の大学にも多くが進学するが、テキストや文献のリーディング・スキルやディベートなどの討論を重ねる方法、特に学術的な論文を定まった形式でまとめる知識やライティング・スキルは不可欠である。

下線部 (筆者) はこの科目の教科書であるが、英語を母語とする者のために書かれた指導書である。具体的なスキルの習得が求められ、典型的な内容科目だと言える。一方で言語学習の上では、すべては英語でなされるので、教授者と学習者との間で、時には学習者間で、さらには学習者自身の内部で、膨大な量の「意味のある活動」が展開され、ここに高度な言語活動が生じる。さらに、「原因と結果」「比較と対照」などのキー概念の学習は英語という言語が持つ文化的な側面に迫ることであり、3-3③で述べたようなコミュニケーション、文化理解や認知作用につながる統合的な学習となる。

こうした L2 による高度な内容学習が可能になるのは、高 1 学年から、英語スキルを積み上げて行くのと同時に、早い段階から美術 I や情報 A (IT) などの比較的具体的な概念の操作を主とする内容科目の学習 (CBI) を経験してきているからだと言える。

## 5 章 KLAS における教室外の英語環境

前章では、英語科目の中で英語を使ってタスクを遂行する様子、内容科目においても contents を英語を使って学ぶ様子を紹介した。これらは、L2 に触れる機会を増やし、実際の言語の使用場面に近い状況で学習させることで学習効果を高めると同時に、英語学習の動機を一層強めることにもつながる。本章では、英語学習の動機を高めるとともに L2 に触れる機会をさらに増やすために、教室の外で行われている取り組みを紹介する。

### 5-1 校内での公式な情報伝達は英語

KLAS では校内放送やすべての掲示物は英語を用いるのがルールとなっている。このことは徹底されており、公式な場面で英語を用いることは生徒・教職員には習慣となっている。校内の伝達手段に、Daily Bulletin と呼ばれる日報がある。校内のあらゆる部署やグループからだされる伝達は英文で掲載されていて、生徒は毎日これを読んで必要な情報に触れ、必要な行動をとる。また、校内には Club, Faculty Family, Activity group などの様々な集団があるが、生徒だけによる非公式集団でない限り、そこでの会話は英語で行われる。校内で最も大きな会議は毎週末に行われる Student Assembly と呼ぶ全校集会である。重要伝達事項はここでなされるが、校長や副校長の訓示をはじめ、生徒・教職員の発言まですべて英語で行われる。

### 5-2 Speech Contest, Writing Contest

コンテストは年に各 1 回行われる。コンテストが近づくと英語各科目の授業の中で、全生徒が準備に入る。トピック選びから原稿作成、推敲や表現技術に至るまで英語教員の指導のもとで準備を進め、各クラスからの代表者が全校コンテストに進み、最優秀作品、発表が選ばれる。すべての生徒が英語で何かを表現する体験を持つことは、英語はあくまでも伝達の媒体であることを確認できる機会になる。

### 5-3 旅行レポート

年に二回、学校旅行がある。20 人程度のグループに分かれて各地の文化や風俗に触れるのが目的であるが、帰校後には、生徒は見たもの感じたものを英語でレポートにまとめる。

### 5-4 同世代の外国人との交流・意見交換

カナダの二つの高校と交換留学協定を結び、6 週間、約 20 名のカナダ人高校生が全寮制の本校で学ぶ。教室で、寮内の居室で、英語を用いて行われる有意義な交流で

ある。

また、オランダのハーグに本部を持つ NGO が主催する Model United Nations（高校生のための模擬国連）に毎年、代表生徒を送っている。生徒は、90 カ国以上から集まった 3000 人以上の高校生らとともに、1 週間に渡って英語で意見交換を行う。

#### 5-5 英語を使つての異文化交流研修と Pre-College Program(大学教育の先行学習)

高 3 時の第 1 学期はこれまで培ってきた英語力をさらに飛躍させるときである。生徒は通常のカリキュラムから離れて、英語集中プログラムで学習する。次の 2 つがある。

- Summer In Leysin (KLAS 本校)

2 つの英語科目と 4 つの異文化理解のための科目からなり、異文化理解の科目では上記のカナダ人高校生とともに英語で学習する。同年代の外国人とともに西洋と東洋の文化の相違についてワークショップを中心にして体験的に学習する。

- Summer Abroad Program (英語圏の大学キャンパス)

英語圏の大学キャンパスでは、その夏期休暇に高校生、留学生向けのさまざまなプログラムが催される。大学の本課程の一部として開講されるものもあり、単位取得も可能である。生徒は、将来の専攻希望も検討しながら受講する。

#### 終わりに

KLAS の英語教育や第 2 言語習得の理論を紹介しながら、コミュニケーション能力の育成のためには文法や語彙などの知識の他に伝達／受取りのための練習が必要であると論じた。KLAS では、この練習のために Communicative な指導法と動機づけのための方策を徹底させて、コミュニケーション能力の育成に成功している。

日本の英語教育の改革は基本的にはこうした考え方や実践と同じ方向にある。その意味では、改革の方向性は正しいと言えるが、これが未だ道半ばであるのは諸目標の達成の程度とスピードの問題である。KLAS の方策の中には、海外の立地だからこそ可能なものもあるが、指導法や動機づけは本来多様なものであり、日本国内でできることもある。全国の教育現場では、英語教育に関わるあらゆる関係者がそれぞれの立場で改革の意義を認識し、真摯に積極的に取り組まなくてはならない。



[注]

- i Educational Test Service: TOEFL, TOEIC などの標準テストを主催する非営利のテスト開発機構
- ii 「ETS-Test and Score Data Summary for TOEFL iBT Test and TOEFL PBT Test, January 2011-December 2011 Test」から
- iii 2006 年入学生から 2010 年入学生の在学中の TOEIC 受験結果から
- iv 「TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2011 (2011 年度受験者数と平均スコア)」から
- v 吉田恒 「英語科教育法の展開」 in 桜美林大学教職課程年報第 2 号 p37
- vi Hymes D, “On Communicative Competence” in J B Pride, J Holes (ed.) Sociolinguistics p269-293 Harmondsworth: Penguin
- vii 出典は www.BreakkingEnglish.com に掲載された記事

[参考文献]

- 1 章
- 1. 白井恭弘『外国語学習の科学』岩波新書 p2-82
- 2. 鳥飼玖美子『TOEFL テストと TOEIC テスト』講談社現代新書 p96
- 3. エレン・ピアリストク, ケンジ・ハクタ『外国語はなぜなかなか身につかないか』新曜社 p8
- 4. Rod Ellis, “Second Language Acquisition” p12: Oxford University Press
- 5. 吉田恒 「英語科教育法の展開」 in 桜美林大学教職課程年報第 2 号 p37 及び p48
- 2 章
- 6. 文部省(1970) 『高等学校学習指導要領』(昭和 45 年 10 月告示) 大蔵省印刷局
- 7. 文部省(1989) 『高等学校学習指導要領』(平成元年 3 月告示) 大蔵省印刷局
- 8. 文部省(1999) 『高等学校学習指導要領』(平成 11 年 3 月告示) 財務省印刷局
- 9. 文科省(2009) 『高等学校学習指導要領』(平成 21 年 3 月告示) 東山書房
- 10. 文科省(2010) 「英語指導方法改善の推進に関する懇談会報告」初等教育局国際教育課
- 3 章
- 11. Robert B Kaplan (ed.) “The Oxford Handbook of Applied Linguistics (2002)” p207-228 New York: Oxford
- 12. Marjorie B Wesche, Peter Skehan, ‘Communicative, Task-based Language Instruction’
- 13. Christiane Dalton-Puffer, ‘Outcomes and process in Content and Language Integrated Learning (CLIL): Current research from Europe’
- 14. Loretta F Kasper, ‘Content-Based College ESL Instruction: An Overview’
- 15. William Grabe, Fredricka L Stoller, ‘Content-Based Instruction: Research Foundation’
- 16. Colin Baker, “Foundations of Bilingual Education and Bilingualism 5<sup>th</sup> Edition” p245-247 Bristol: Multilingual Matters,
- 17. Hymes D, “On Communicative Competence” in J B Pride, J Holes (ed.) Sociolinguistics p269-293 Harmondsworth: Penguin
- 18. Karen Millam, ‘Content-based Instruction: Practical Application of Theory’ p2
- 19. Simon Downes, Kazuki Sugihara, ‘The shift toward language and Content Integration: Immersion as an Alternative to Traditional English Language Education in Japan’ p3
- 4 章, 5 章
- 20. 渡邊博司 「KLAS の教育プログラム」2000 年 7 月 p18
- 21. スイス公文学園高等部 「KLAS Catalogue 学校要覧 2012-2013」2012 年 p7
- 22. 吉田恒 「第 2 言語習得と言語環境・学習環境との関係」 in 桜美林論集第 31 号 p70